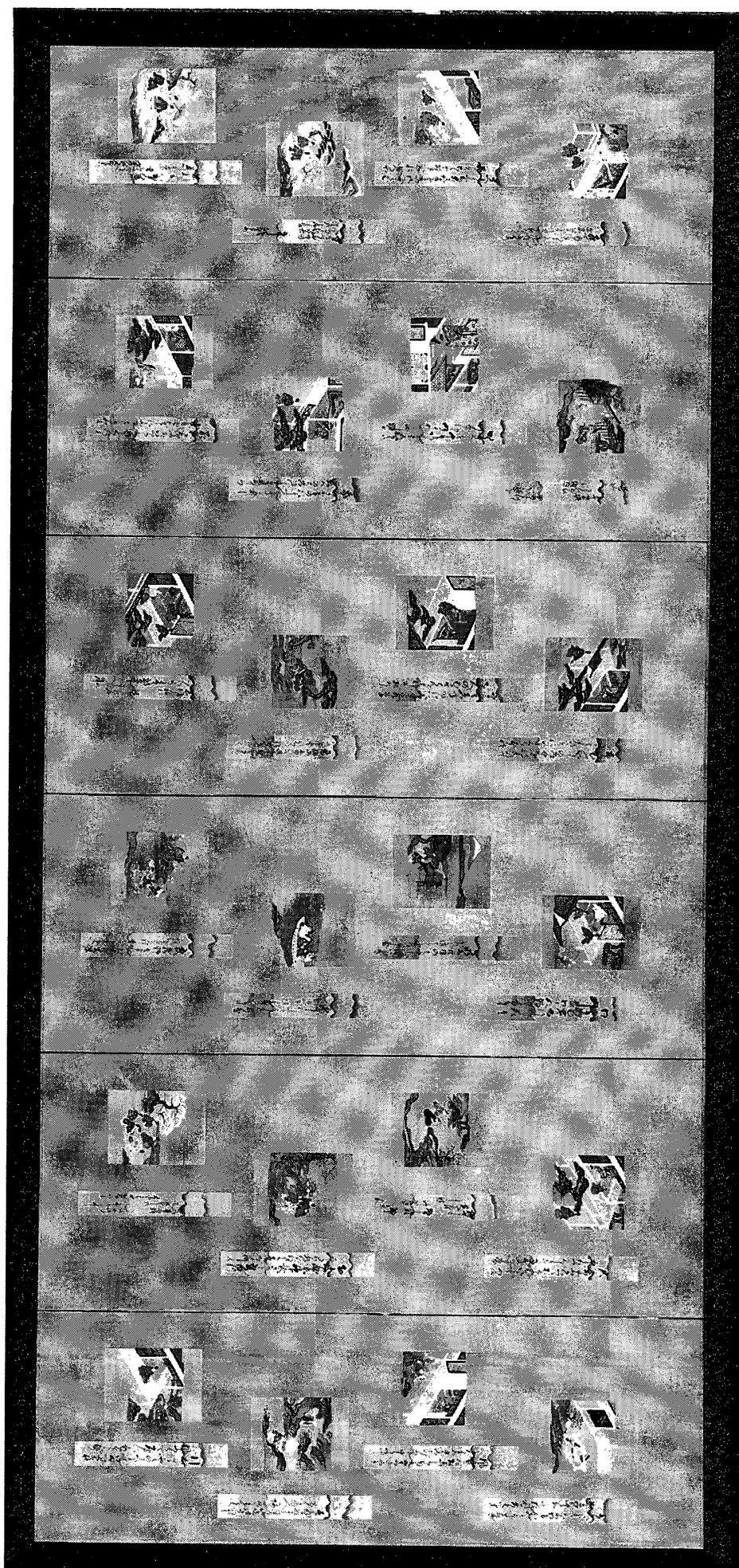


齋宮歴史博物館蔵 伊勢物語図色紙貼交屏風 右隻



# 斎宮歴史博物館蔵

## 伊勢物語図色紙貼交屏風について

木戸 久二子  
(日本文学)

はじめに

本稿では、斎宮歴史博物館（三重県多気郡明和町）所蔵の伊勢物語図色紙貼交屏風（以下、「貼交屏風」と略称する）を取り上げる。初めに、『館蔵資料目録』<sup>(1)</sup>により書誌を掲載する。

目録番号二十三、登録番号百五十八、伊勢物語図貼交屏風、江戸前期、紙本着色六曲一双、縦一七四・五センチ、横三七〇・〇センチ。平成二年三月三十日収蔵。

『伊勢物語』全百二十五章段のうち、四十二章段四十八場面の絵を描いた色紙と、その絵に該当する和歌を書いた短冊を貼り込んだ屏風である。画面の選択および構図は嵯峨本によっている。細密な土佐派画風で、画面の上下に金のすやり霞を引いており、「17世紀末期頃の奈良絵本から挿絵のみ採って再表装した可能性がある」<sup>(2)</sup>と考えられる。以下、右隻の第一扇から順に、短冊の歌については翻字し、絵は章段を記していく。その際、和歌で行を改めているところにはスペースを置いた。また、扇ごとに短冊の歌の本文校異を掲げた。<sup>(3)</sup>

### 一 右隻

#### 第一扇

歌 第一段 春日野、若紫のすりころも しのふのみたれかきり  
しられす

絵 第一段（春日の里）

歌 第一段 みちのくの忍ふもちすり誰ゆへに みたれそめにし  
我ならなくに

絵 第二段（西の京）

歌 第三段 思ひあらは律の宿にねもしなん ひしきものには袖  
おしつゝも

絵 第三段（ひじき藻）

歌 第二段 おきもせず寝もせてよるをあかしては はるのもの  
とて詠暮しつ

絵 第七十八段（山科の宮）

#### 第二扇

歌 第七十八段 あかねと も岩 にそか ふる 色 みえぬ

こゝろを 見せん よし のなければ  
絵 第二十二段（千夜を一夜に）

歌 第八十七段 我か世をはけふか明日かと待かひの 涙の瀧と  
いつれたかけん

絵 第八十七段の一（布引の滝）

歌 第八十段 ぬれつゝそし ゐて折つる 年の内に 春は幾日  
も あらしと思へ は

絵 第八十段（衰へたる家の藤）

歌 第四段 つきやあらぬ春や昔の春ならぬ 我か身ひとつはも  
とのみにして

絵 第四段（西の対）

### 第三扇

歌 第五段 人しれぬ我かよひちのせきもりは よひくことに  
うちもねなゝむ

絵 第五段（関守）

歌 第十段 我方によると啼なるみよしの、 たのむのかりをい  
つか忘れん

絵 第二十段（春のもみぢ）

歌 第二十段 きみかためたをれるえたは春なから かくこそあ  
きのもみぢしにけり

絵 第二十九段（花の賀）

歌 第六十段 さつきまつ花たちはなの香をかけは むかしのひ  
とのそてのかそする

絵 第六十段（花橘）

〔校異〕第二十段「もみぢしにけり」―諸本「もみぢしにけれ」

### 第四扇

歌 第六十八段 雁なきて菊の 花咲秋はあれと 春の うみへ  
に すみよ しのはま

絵 第六十八段（住吉の浜）

歌 第一百段 咲花のしたにかくるゝ人おゝみ 有しにまさるふ  
ちの影かも

絵 第八十一段（塩釜）

歌 第九十三段 逢ふけなく思ひはすへしなそへなく たかきい  
やしきくるしかりけり

絵 第九十三段（思ひわびて）

歌 第六段 白玉かなにそと人のとひし時 つゆとこたへてきえ

なましものを

絵 第六段 (芥川)

〔校異〕第九十三段「逢ふけなく」―諸本「あふなあふな」

第五扇

歌 第七段 いと、しく過行方の恋しきに うらやましくも帰る

波哉

絵 第七段 (かへる浪)

歌 第八段 しなのなる浅間のたけに立烟 おちこち人のみやは

とかめぬ

絵 第八段 (浅間の嶽)

歌 第六十三段 さむしろにころもかたしきこよひもや こひし

きひとにあはてのみねむ

絵 第六十三段 (つくも髪)

歌 第九段 から衣きつ、なれにしつましあれは はる／＼きぬ

る旅おしそおもふ

絵 第九段の一 (八橋)

第六扇

歌 第八十七段 晴る、夜の星か川邊のほたるかも 我すむかた

のあまのたくひか

絵 第九十五段 (へだつる関)

歌 第四十一段 紫のいろこき時はめもはるの、 なるくさきも

わかれさりけり

絵 第六十九段 (狩の使)

歌 第六十九段 君や 越し我や 行 けむ思 ほ えす 夢

かう つ、か ねてか 覚えて か

絵 第四十一段 (紫)

歌 第九十五段 彦星に恋はまさりぬ天の川 へたつるせきを今

はやめてよ

絵 第八十七段の二 (芦屋の浜)

二 左隻

第二扇

歌 第二十三段 くらへこしふりわけかみもかたすき ぬきみな

らすしてたれかあくへき

絵 第二十三段の一（筒井筒）

歌 第二十三段 風ふけはおきつしらなみたつたやま よはにや  
きみかひとりこゆらむ

絵 第二十三段の二（河内越）

歌 第九段 するがなるうつ山邊のうつゝにも 夢にも人にあ  
はぬなりけり

絵 第九段の二（宇津の山）

歌 第四十五段 行ほたる雲のうへまでいぬへくは秋 風ふくと  
雁につけこせ

絵 第四十五段（行く蜚）

## 第二扇

歌 第二十三段 君かあたり見つゝおくらむいこまやま 雲なか  
くしそ雨はふるとも

絵 第二十三段の三（高安の女）

歌 第六十五段 恋せしと みたらしかはに せし御祓 神は  
うけすも 成に ける かな

絵 第六十五段（禊）

歌 第百六段 ちはやふる神代もきかず龍田川 からくれなゐに  
水くゝるとは

絵 第百六段（龍田川）

歌 第八十二段 世の中に絶 てさくらの なかりせは春のこ  
ころやのと けからまし

絵 第八十二段（渚の院）

〔校異〕第八十二段「春のころや」―諸本「春のころは」

## 第三扇

歌 第九十八段 わかたのむ君か為にと折花は 時しもわかぬ物  
にそ有ける

絵 第九十八段（梅の造り枝）

歌 第九段 時しらぬ山はふしのねいつとてか かのこまたらに  
雪のふるらむ

絵 第九段の三（富士の山）

歌 第九段 名にしおはゝいさことゝはん都鳥 わかおもふひと  
は有やなしやと

絵 第九段の四（都鳥）



歌 第十二段 武蔵野はけふはなやきそ若草の つまもこもれり

第五扇

我もこもれり

絵 第十二段 (武蔵野)

歌 第七十一段 千早振 かみのあかき も越ぬへし ゆめかう

第四扇

絵 第七十一段 (神の斎垣)

歌 第二十四段 あら玉のとしのみとせを待わひて たゝこよひ

歌 第百十九段 かたみこそ今はあたなれこれなくは わする、

こそにひまくらすれ

時もあらまし物を

絵 第二十四段 (梓弓)

絵 第百十九段 (形見)

歌 第四十九段 うらわかみねよけにみゆる若草 を人のむすは

歌 第二十七段 我はかりものおとふ人はまたもあらし とおも

んことおしそおもふ

ひはみつのしたにもありけり

絵 第四十九段 (初草)

絵 第二十七段 (たらひの影)

歌 第十五段 忍ふ山しのひて通ふみちもかな ひとの心のおく

歌 第十八段 紅にゝほふはいつらしらきくのえ たもとをゝに

を見るへく

ふるかともみよ

絵 第五十段 (行く水)

絵 第十八段 (白菊)

歌 第八十一段 しほかまに いつかきにけむ朝なきに 釣する

〔校異〕第七十一段「ゆめかうつゝかねてかさめてか」―諸本「大宮

舟は こゝによらな む

人のみまほしさに

絵 第百一段 (あやしき藤の枝)

第二十七段「ものおとふ人は」―諸本「ものおもふ人は」

第十八段「しらきくの」大島本―諸本「白雪の」

〔校異〕第十五段「おくを見るへく」―諸本「おくもみるへく」

「ふるかともみよ」―諸本「ふるかともみゆ」

## 第六扇

歌 第十四段 夜も明はきつにはめなてくたかけの またきにな

きてせなをやりつゝ、

絵 第十四段 (くたかけ)

歌 第五十一段 うへしうへはあきなきときやさかさらむ 花こ

そちらめねさへかれめや

絵 第五十一段 (前栽の菊)

歌 第六十七段 昨日けふ雲の たちまひかくろふは 花のはや

しを うしと なりけり

絵 第六十七段 (花の林)

歌 第八十三段 忘れては 夢かとぞ思ふ おもひきや 雪ふみ

分て 君を見むとは

絵 第八十三段 (小野の雪)

〔校異〕第十四段「せなをやりつゝ、」——諸本「せなをやりつる」

## 三 色紙と短冊の不一致

色紙との組み合わせからいくと当然あるべき第二十二・二十九・五十段の歌がなく、代わりに第一・十・十五段の歌が入っている。

右隻第一扇では、第二段の挿絵とされる色紙に第一段の歌が添えられている。この第二段の絵は、第二段の本文とも歌とも全く合致しないことから、本来は第一段の絵であったと考えられる。<sup>(4)</sup> 第一段「春日野の若紫のすり衣」の歌に続く本文「となむ、おひつきていひやれりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ」の「おひつきて」は、現在は普通「すぐさま」「時間をおかずに」等と訳している。ところが『和歌知頭集』<sup>(6)</sup>は、

この女ども、野にいで、男のかりするをみて、ゆふぐれにかへりけるみちに、おいつかせたる也。

と、女が昔男に追いついて、と解釈する。「陸奥のしのぶもぢずりたれゆゑに」の歌は、その追いついてきた女が詠みかけたと見なしているわけである。第二段とされる絵は女が昔男に後ろから声をかけている場面だと思われる。つまり、『知頭集』のような解釈によって描かれた挿絵だったのが、後の時代の人々はその解釈が理解できなくなり、第二段の絵と勘違いされてしまつて今に至っているのである。

その過程は、古体を残すという小野家本絵巻<sup>(7)</sup>を見るとよく分かる。

同絵巻の第一段の挿絵には異時同図的な描き方で、堀の外で女房に歌を託す昔男と、後ろから来た女に呼び止められて振り向く昔男の姿が描かれている。一方、穂久邇文庫絵巻では、小野家本での異時同図的な二つの場面が二枚の絵に分けられてしまつてゐる。小野家本では第一段の絵の前の詞に、第一段だけでなく第二段本文まで入っている。

これが、第二段の絵と勘違いされてしまつた原因の一つだろう。嵯峨本<sup>(8)</sup>は穂久邇文庫絵巻の系統の図様を用いている。江戸時代、嵯峨本が伊勢物語絵の世界を席巻したことから、勘違いが定着してしまつたの



である。この「貼交屏風」を制作した人物は、意識していたかどうかは別にして、『和歌知頭集』の解釈による絵に従っていたことになる。

第二段の絵に第一段の歌が添えられたことから、余ってしまった第二段の歌「おきもせずねもせで夜を明かしては…」は第七十八段の絵に番えられた。その第七十八段の歌は、第二十二段の絵に添えられている。そして、第二十二段の歌はこの屏風には存在しないのである。なお、第七十八段と第二十二段の絵は第一扇の一番下と第二扇の一番上である。あるいは、短冊や色紙を貼る順番に並べておいた際、順番が入れ替わってしまったことがあったのかもしれない。というのは、「貼交屏風」の色紙と短冊が一致しない例は、すべて上下に接している例と同じ扇のうちかのいずれかだからである。

右隻第三扇では、第二十段の絵に第十段の歌が、第二十九段の絵に第二十段の歌が添えられている。ちなみに、両者の位置も上下に並んでいる。ここで第十段の歌が登場するのは、かなり問題である。嵯峨本に第十段の挿絵は存在せず、ほとんど全章段に絵を載せるもの以外、第十段を絵画化しているものは見られないからである。章段自体も有名といえるものではない。番えられている第二十段、またはその下の第二十九段の絵と第十段の歌が合致しているとも思えない。

右隻第四扇では第八十一段の絵に第百一段の歌が、左隻第四扇では第百一段の絵に第八十一段の歌が当てられている。この両段は歌が取り違えられているのである。両段の絵は、屋敷の庭に面した一室の簀子縁に男数人が座っているというよく似た構図である。もちろん、第八十一段には塩釜にたとえられる遣水があるし、第百一段では室内に藤の花を挿した花瓶が見えるなど、本文に沿った違いは存在する。結

局、『伊勢物語』にあまり詳しくない人物の手による表装だと見るべきなのであろう。

右隻の左端、第六扇は驚くことに、絵と歌が合っているものが一つもない。一番上と一番下（第八十七段と第九十五段）が入れ替わり、中の二つ（第四十一段と第六十九段）もまた入れ替わっている。屏風への制作の際か、あるいは剥がれたものを貼り直す際に貼り間違えてしまったのだろう。

左隻第四扇では、第五十段の絵に第十五段の歌が添えられている。この第十五段は先に述べた第十段同様、嵯峨本には絵がない章段であり、やはり著名な段であるともいえない。

#### 四 色紙の絵—嵯峨本との違い

嵯峨本は四十九場面を絵画化しているが、この「貼交屏風」の絵は四十八枚であり、一場面少ない。存在しないのは第百二十五段、臨終の場面である。おそらくは、縁起を担ぐ必要がある、いわゆる「嫁入本」としての屏風だったのであろう。以下に、嵯峨本挿絵との違いを「貼交屏風」の順番で述べる。

第三段 簀子縁に嵯峨本には存在しない板の仕切りがある。

第二十二段 画面左手前の、鶏の番がない。

第五段 三人の人物のうち、嵯峨本では画面奥にいる武士の位置が、二人の男の横になっている。また、嵯峨本では邸内に描かれている松の木が、男たちの手前と奥（つまり、路上）に

見える。

第六十段 簀子縁に嵯峨本には存在しない板の仕切りがある。

第六十三段 嵯峨本では老女は障子の前に立っているが、「貼交屏風」では開いた妻戸の前に立つ。開いた妻戸の中には御簾がかかっている。

第八十七段の二 嵯峨本とは左右が反転した形になっている。

第二十三段の二 室内に座っている女の前に琴がない。

第二十三段の三 嵯峨本の昔男は垣越しに垣間見しているが、「貼交屏風」では門の引き戸を開けてのぞいている。

第十二段 嵯峨本の昔男は手に何も持っていないが、「貼交屏風」の昔男は抜いた刀を右手に持つ。

第八十三段 嵯峨本では五人いる男が一人少ない。

第十八段 嵯峨本には描かれていない菊の花でいっぱいの前栽がある（第五十一段と似る）。

この「貼交屏風」の絵は嵯峨本の構図を忠実に写しており、画家の独創性はあまり感じられない。左右を反転させることや人物の人数を変えることは伊勢物語絵でしばしば行われるアレンジだが、「貼交屏風」では左右反転が第八十七段の二、人数の変更が第八十三段と、それぞれわずかに一例のみである。

嵯峨本では欠かせない小道具として使われているものを描いていない例が、第二十二段と第二十三段の二である。第二十二段は、四首の歌のうちの最後の歌「秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残りて鶏や鳴きなむ」に従い、共寝している男女の手前に鶏の番が描かれる

が、「貼交屏風」には見えない。同じく第二十三段の二「河内越」では室内の女の前に嵯峨本は琴を描くが、「貼交屏風」には描かれていない。どちらの例も小野家本絵巻等には見えないので、それらを描いていない「貼交屏風」は嵯峨本以前の古体を伝えている可能性もある。しかし、第二十三段の「河内越」の琴に関しては、鎌倉時代成立の白描伊勢物語絵巻に描かれているのが確認できるので、一概にはいえそうにない。

なお、嵯峨本にない小道具が登場する例としては、第十二段の武蔵野の段があげられる。「貼交屏風」では昔男が刀を抜いて、追つ手たちに立ち向かうとするかのようなのである。管見に入った限りでは、鉄心斎文庫蔵の著色絵入本伊勢物語（江戸時代中期）が抜いた刀を手に持つが、こういう例は少ないのではないか。

それから、室内建具等の扱いに気になるものがある。簀子縁の途中に板の仕切りを描いているのが目に付くが、これは嵯峨本には見られない。家屋の造作にあまり知識がない人物が描いたのであろうか。

## 五 短冊の歌—本文校異

短冊に書かれた和歌の本文校異を扇ごとに示したが、ほとんどが独自異文である。いや、独自異文というよりは、てにをはの間違い等、思い込みや不注意から生じる誤写が多いというべきであろう。独自異文の中で、気になるもの三例について言及しておく。

右隻第四扇の第九十三段歌の初句「逢ふけなく」は、「逢ふ気なく」というつもりなのかもしれない。が、おそらくは、『小倉百人一首』

で知られた慈円の歌「おほけなくうき世のたみにおほふかなわがたつそまにすみぞめのそで」(『千載和歌集』巻第十七雑歌中・一一三七「不知題 法印慈円」)の「おほけなく」(身の程知らずである。恐れ多い。)との混同だと思われる。仮名遣いは違うが、耳で聞くとどちらも「オーケナク」となる。なお、「あふなあふな」は語源がはっきりせず、「おふなあふな」「おほなあほな」など、異説が多い。

左隻第五扇第七十一段の歌「千早振…」の下句「ゆめかうつ、かねてかさめてか」は、第六十九段の「君やこし我や行きけむ…」の歌の下句そのままである。いくら伊勢斎宮関連連章段の一つとはいえ、本来は「大宮人のみまほしさに」とあるべきところを、こういう間違いをするものだろうか。ケアレミスと見るべきなのであろうが、まるで、上の句と下の句が別の札に書かれているかたを参考にして、この短冊の歌を書いたかのようなようだ。

左隻第六扇の第十四段「夜も明はきつにはめなて…」の歌の結句「せなをやりつ、」は、『伊勢物語』に就きての研究<sup>9)</sup>等を見る限り、「貼交屏風」以外にこの本文をとるものは存在しない。ところが、室町時代物語の早稲田大学図書館蔵『雀さうし』<sup>10)</sup>に引かれる「よもあけは…」の歌の結句は、「貼交屏風」と同じく「せなをやりつ、」となっている。この『雀さうし』は、引用している『伊勢物語』の他の歌を見ても、定家本以外の本文をとっている例がいくつか指摘でき、由緒正しい『伊勢物語』本文を使えていないことがうかがえるのである。また、解説によると、「写しは、近世前期であろう。本文には誤写が多いようである。」ということで、「貼交屏風」の短冊の書写者との類似が思われる。

## おわりに

最後に、この「貼交屏風」の短冊について考えてみたい。以下の三通りが想定できる。

- 1 当初からこの四十八枚の短冊だった。
- 2 『伊勢物語』全部の歌を書いた短冊から、表装する際、該当すると見なしたものを選んだ。
- 3 色紙が先にあり、該当する歌を選んで書いた。

1では、著名章段とは言い難い第十・十五段の歌(当然ながら、業平の歌ではない)が入っている理由がよく分からない。そうすると2か3かということになるが、どちらにしても、色紙の絵と短冊の歌の不一致というミスをこれだけ数多くおかしたというのは奇妙である。

絵は別にして、江戸時代の中頃、『伊勢物語』を生半可に知っている人物によって歌が書かれ制作された貼交屏風、ということになるのか。なお、歌の筆者が一名なのかあるいは複数名なのか、即断は難しい。斎宮歴史博物館蔵のこの屏風は、肝心の伊勢斎宮関連連章段のうち第六十九段は第四十一段と歌が入れ替わり、第七十一段は歌の下句が第六十九段のそれと間違っているという、いささか残念ではあるが特徴的な屏風であった。

## 注

(1) 『斎宮歴史博物館 館蔵資料目録』(斎宮歴史博物館、一九九九年) 九六頁。

- (2) 『館蔵資料目録』内の、「斎宮歴史博物館の資料収集活動」七頁。
- (3) 『伊勢物語』の本文校異は、池田亀鑑氏『伊勢物語に就きての研究（校本篇）』（大岡山書店、一九三三年 有精堂、一九五八年）、福井貞助氏『伊勢物語に就きての研究（校本補遺篇）』（有精堂、一九六一年）による。
- (4) 版本文庫1『伊勢物語（慶長十四年刊嵯峨本第三種）』（『国書刊行会』、一九七四年）の、片桐洋一氏による「解題篇」二二～二三頁。
- (5) 『伊勢物語』本文は、学習院大学蔵『天福本伊勢物語』（武蔵野書院、一九六三年）による。
- (6) 宮内庁書陵部蔵『和歌知頭集』（片桐洋一氏『伊勢物語の研究（資料篇）』明治書院、一九六九年）。
- (7) 伊藤敏子氏『伊勢物語絵』（角川書店、一九八四年）。以下、『伊勢物語』絵に関する記述は断らない限り同書による。
- (8) 嵯峨本は、片桐洋一氏『伊勢物語（慶長十三年刊嵯峨本第一種）』（和泉書院、一九八一年）による。
- (9) 『新編国歌大観』（角川書店）による。
- (10) 『室町時代物語大成』第七、五六二頁（角川書店、一九七九年）。